

病児と親 支える施設を

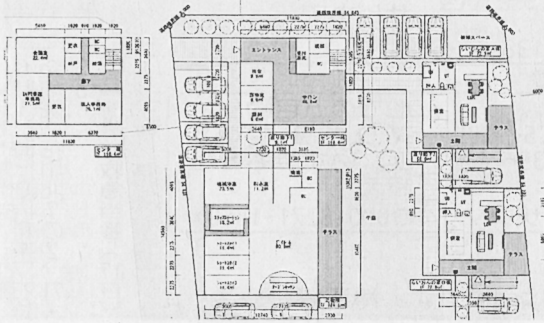
こどもホスピスのニーズは、闘病中の子ども宅への訪問看護を通じて知った。重度障害児には公的サービスのあ

り短期入所施設があるが、小児がんや難病の子どもは同様のものが少ない。病気の子どもにも外出する楽しみ、家族

にも世話から離れて一息つく時間が必要だ。病児の家族から相談を受け、重度障害児向けのショートステイに「遊びに来てもらう」こともあった。自身の経験からも、その必要性は実感できる。10年以上前、長女が入院したときのこ



うんじょう・よしえ 1980年、音更町生まれ。帯広柏葉高校から北海道医療大に進学し、卒業後、薬剤師に。趣味はドラッグストア巡り。棚を見て、サプリメントの流行を調べたり、安くてよく効きそうな市販薬を探したりするのが好きだ。



計画中のこどもホスピスのイメージ図。ここからさらに改良を加えていく(ソルウェイブ提供)

運上佳江 さん 45 (札幌市)

さっぽろこどもホスピス 推進協議会代表

に勉強していた。ある日、母親から、病室を訪れた女の子の兄を紹介された。「兄は受験なのに勉強せず困る。逆だったらよかったのに」。軽口でも、子どもが傷つくような言い方に内心驚いたが、責める気にはなれなかった。「本当に疲れているんだな」と悲しくなった。長期の付き添い入院の大変さは、自らも身に試みていた。食事は院内のコンビニで買ったカップ麺。風呂にもあまり入れず、足の臭いが気になった。不安にさいなまれても、大部屋では泣くこともできない。「あのお母さんも気持ちに余裕があれば、ああは言わなかったはず」と思う。推進協議会では28年に札幌市内でこどもホスピスを建設しよう、準備を進めている。目指すのは、看護師が常駐し、利用者、特に子の世話を一手に担うことの多い母親が安心できる場所だ。「当事者の声は何より大切。これなら使いたいと思ってもらえるものを目指して、計画を前に進めたい」(桜井啓道)